

小さな叫びを大きな叫びに

沖縄県 南城市立玉城中学校の生徒の作品

「かわいそう」

私は今まで数え切れないほどこの言葉を浴びてきた。家族のことを話すと、決まってこう言われる。いつからか私は予防線を張るように嘘をつくようになった。「かわいそうな子」というレッテルを貼られるのが怖かったから。「親に愛されてる子」じゃないと輪に入れてもらえないと思ったから。弱さも見せる強さも嫌われる勇気も私は持っていない。

私が生まれて間もない時から両親は共働きで、私はよくおばあちゃん家に預けられていた。そんなおばあちゃんも体が弱く、私と遊べる余裕も無かったので、私は一人でテレビを見たり、人形と遊ぶのが日課だった。小学校に上がると、ずっとおばあちゃん家にいるわけにもいかないからと鍵を持たされた。休日朝起きると自分一人しかいないことも夜寝る時誰もいなくて、お母さんの枕を抱いて寝ることも当たり前だった。なのである程度のことは何でも一人でこなしてきた。両親がギャンブルで家をあけることも多かったので、風邪をひいても一人でぐにゃぐにゃの天井を見つめることしかできなかった。テストでいい点を取って帰っても見せる人などいないので全部ゴミ箱へ捨てていた。あの時ほど自分を哀れだと思ったことはない。中学校に上がり初めてのテストで結構いい点を取ることができたので、ウキウキで両親の帰りを待って、テストを見せた。さすがに褒めてくれると思っていたけど、父の口から出た言葉は、

「次はもっと頑張れ。」

だった。その時、私の中で何かが切れた。それから私は周りが驚くほど荒れた。授業もろくに受けなくなり、ひたすら遊び回って、学校に呼び出されることも多々あった。でもそれはイキっているわけではなく、積み重なった「寂しい」という感情を自分で対処できなくなってしまったから。何をしても認めてもらえない事実と寂しさで押し潰されてしまった。幼少期の経験で、甘え下手になってしまった私の唯一できるかまちょであり、SOSだった。何度も親にぶたれ、理由を聞かれたが、私は頑なに答えなかった。今更寂しいなんて言えるわけがなかった。ある日、私はお母さんと二人で話をした。母は第一声、

「寂しい思いばかりさせてごめんね」

と言った。その瞬間、からからだった私の心に熱がこもっていくのを感じて、私は数年ぶりに母の腕で泣いた。母は幼少期、欲しいものがあっても全然買ってもらえず、ずっと我慢してばかりだったので、自分の子供にはお金の面で不自由な思いはさせないと決めていたらしい。だから仕事もできるだけたくさんやって、バイトもしていたと話された。私は初めて弱音を漏らした。

「私が欲しかったのはお金じゃない。私は仕事終わり疲れているのにボロボロの見た目で授業参観に来てくれたり、運動会でうれしそうに私を撮ってくれたりすることがすごくうれしかった。」そう言うと母は今まで見たことがないほど泣いていた。今の時代、子どもへの育児放棄などが問題視されているが、家庭内の問題はあまり気づかれない。子どもが相当なSOSを出さない限り救われない深刻な状況だ。私は虐待されたとは思わないが、恵まれない環境にいたことは変わりないと思う。私は、人に甘えることが下手で頼ることが苦手だった。だから、すごく重たい荷物を一人で運んでいるような感じで苦しかった。なので、もし誰かが苦しんでいた、辛い思いをしているのなら、私は迷わず手を差し伸べたい。それで少しでも心に温かさを取り戻せるのなら私は力になりたい。今も、どうしようもない感情で自分自身を失い、寂しさと孤独感で潰されている子が何人もいると思う。「寂しい」という感情を消化できず、道を踏み外してしまう子も少なくありません。子どもが求めているのはお金ではなく、家族との時間です。親によって空いた穴は、親でしか埋められません。今も親の温かさを求めて、小さく叫び続けている子どもがいる。どうか、このことを忘れないでください。

この深刻な家庭内問題は、大人でしか解決できません。子どもは、ただSOSを出すことしかできません。だからこそ考えてほしいんです。子どもの未来を。子どもの幸せを。心の行き場のない子どもを減らすことができるのは大人であり、親であるあなた達です。私も一人の子どもとして戦い続ける。弱さを見せる強さと嫌われる勇気を持って。